64　ボランティアは志士だ

米国ではボランティアが盛んなのに、日本では、なぜそうではないのか。「それは、米国が乱世だから」という説がある。

米国では、建国以来、文化や価値観が入り乱れ、その上、国民は「治められる」ことが好きではない。麻薬、暴力、と問題の種も尽きない。そこで、一人一人が自発的（ボランタリー）に社会の諸問題にかかわっていく伝統が定着した。

一方、日本では、国民の「お上」への期待が大きい。問題が起こると、「行政は何をしている！」と憤慨し、時がたつと忘れてしまう。乱世にも遠かった。

この「乱世、人はボランティアになる説」が阪神大震災で見事に証明された、と福祉教育研究会代表の木原孝久さんが、『月刊元気予報――市民活動の先の先を読む』で分析している。

大震災の現場は、いわば乱世。行政機能はマヒし、「自分がやらなきゃ、だれがやる」と発奮した人たちが、阪神へ阪神へと向かった。本社の面接調査によると、「初めてボランティアをした」人が約七割、「活動を続けたい」と答えた人が八割にのぼる。

だが、「自分のしていることがほんとうに良いことなのか」「被災者の自立を助けているのか妨げているのか、わからない」と悩む人も少なくなかった。

「役にたちたい」という気持ちが実を結ぶためには、何が必要なのか。

日本最初のボランティアセンターである大阪ボランティア協会事務局長の早瀬昇さんは、「まず大切なのは想像力」と言う。

早瀬さんたちは、震災後ただちに、日本青

95・4・18

福祉が変わる　医療が変わる

●朝日新聞論説委員室＋大熊由紀子

「ぶどう社」

年奉仕協会や経団連の一%（ワン）クラブなどと一緒になって、「被災地の人々を応援する市民の会」の前線基地を開いた。

「被災者支援」という言葉を意識して避けた。「持てるものから持たざる弱者へ」という、上から下へ向かった姿勢を避けたかった。主役はあくまでも「被災地の人々」であり、ボランティアは生活復興を手伝う立場だ、ということをはっきりさせるためだった。

「日帰り」を基本にした。泊まり込むとトイレを使い、ごみを出し、被災地に負担をかける。日帰りなら、ごみも持って出ることができる。応援の大半は日帰りで可能だし、その方が普通の市民が参加できる。三カ月間にのべ二万人が参加した。

どんなに大勢のボランティアが名乗り出ても、コーディネーターがいなければ、何カ月も待機させられるだけで、にっちもさっちもいかなくなる。それも今回、再認識された。

コーディネーターには、二通りの役割がある。一つは、ボランティアを必要とする現場と志願者を結びつけ、ボランティアする人、される人が良い関係になるためのコツを未経験者に指南すること。もう一つは、ボランティア、企業、行政といった性格の異なる団体や個人を結びつけること。

木原さんによると、名コーディネーターの条件を備えているのは、乱世に現れた坂本龍馬だという。その条件とは――

先を読む、情報に強い、夢を語る、問題児を使いこなす、お役人や商人を活用、老獪で純情、強い好奇心、大物を動かす、弱音を吐かない、大きく発想、あけっぴろげ、反目する同志を主義でなく実利で結びつける、広い人脈……。

ボランティアの語源は「自らの意志で」だから、志士は、文字通りボランティアということになる。今回の震災は、ボランティアの訳語には「奉仕者」より「志士」が似合う、そんなことも教えてくれた。

●社説に登場した会が発行している機関誌

『月刊元気予報』
福祉教育研究会
☎〇四九二―九四―八二八四

『月刊ボランティア』
大阪ボランティア協会
☎〇六―三五七―五七四一